

清沢満之 『宗教哲学骸骨』 関連資料

## はじめに

小野 蓮 明

清沢満之研究班では、清沢満之全集編纂にむけて、基礎資料を継続的に収集してきている。特に、清沢自身の文章で既に雑誌などに公開されたものを中心に検討作業を進めている。一九九六年度までには『精神界』に掲載された論文の検討を終えた。一九九七・一九九八度もその課題を引き継いで、とくに『宗教哲学骸骨』関係の資料を中心に資料を収集し、検討を重ねてきた。今回はそれらの中から雑誌『教学誌』に一八八八（明治二十二年）の十二月から掲載された「宗教哲学講義」を公にすることにした。

この論文は「徳永満之述」とあり、これまで発刊されているどの全集にも収められておらず、ほとんど注意されることのなかったものである。一九九六年十月に横浜国立大学名誉教授の久木幸男先生が本学においてご講演くださった際に、その所在についてご教示くださり、研究班としても収集に当たったものである。

内容としては一八九二（明治二十五）年八月に発刊された『宗教哲学骸骨』に先立つものである。『宗教哲学骸骨』が一八九一（明治二十四）年九月から一八九二（明治二十五）年七月までの講義が元になっていることを考える時、この「宗教哲学講義」は、さらにその基盤としての意義を有していると考えられる。清沢の思想形成の展開を見ていく上で、重要な資料とすることができる。

今回、公表するにあたっては、なるだけ原本に忠実な形を再現することに努めた。編集方針については凡例を参照さ

れたい。

また、清沢自身の文章ではないが、「宗教哲学骸骨ヲ読ム。」を併せて翻刻することにした。これも所在については『清沢満之全集』全八巻（法蔵館）中ですでに言及されていたが、実物はこれまで衆目に触れることのなかったものである。この論文は「立花銃三郎」の記名があり、一八九二（明治二十五）年十一月五日発行の『哲学雑誌』に掲載されたもので、当時、清沢の『宗教哲学骸骨』がどのような形で読まれ、どのような評価を得ていたかを知る格好の資料である。これについても編集の手をなるべく加えずに、原本の様子を伝えるように努めた。

なお、資料の詳細については、名畑直日児・三浦統研究補助員に若干の解説をお願いした。併せてお読みくだされば幸いである。

最後に、「宗教哲学講義」の所在についてご教示くださいました久木先生に、この場をかりて厚く謝意を表する次第である。

## 凡例

- 一、段落箇所、傍線、傍点は原文どおりとした。
- 一、送り仮名、句読点、濁点は原文どおりとし、一切補わなかった。
- 一、漢字は原則として常用漢字を使用し、変体仮名、略字は通常の仮名に改めた（「↓コト 卍↓トモ 卍↓トキ 子↓ネ 卍↓イ ↓シテ など）。また繰り返し符号「、」も仮名に改めた。
- 一、誤字、脱字、衍字と思われる部分は右傍に（ママ）と記した。また意味の取りにくいもので推測できるものには適宜右傍にカッコに入れて示した。（例えば、<sup>(哲学)</sup>学哲）
- 一、判読不可能の部分は□で示した。